名古屋芸大グループ通信

54
January
2021

名古屋芸術大学開学50周年記念事業
東キャンパス交流テラス「TERA（テラ）」渡り初め式を行いました

Close up! NUA-ism
～進化する「名古屋芸大」のDNA
NUA-Student
アートクリエイターコース 4年　小栗みずき
大学院音楽研究科 器楽専攻 2年　豊田萌

Master Artist
マスター＝アーティスト
モノの魅力
美術領域
アートクリエイターコース
非常勤
荒木由香里

芸術学部 芸術学科 2021年度 新領域／新コース特集

跳び越えるための垣根

BORDERLESS 2021

名古屋芸術大学 産学官連携プロジェクト

■Vol.6
あま市七宝アートヴィレッジのデザインプロデュースを行いました

■Vol.7
名古屋芸術大学×名古屋マリオットアソシアホテル
メタル＆ジュエリーデザインコースの学生が名古屋マリオットアソシアホテル正月装飾を制作しました

名古屋芸術大学グループ
NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS
http://www.nua.ac.jp

■名古屋芸術大学／大学院：音楽研究科　美術研究科　デザイン研究科　人間発達学研究科
学部学科：芸術学部　芸術学科　音楽領域　デザイン領域　美術領域　芸術教養領域　人間発達学部　子ども発達学科
■名古屋芸術大学保育専門学校
■名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園
■滝子幼稚園　■たきこ幼児園　■愛知保育園
■幼保連携型認定こども園 森のくまっこ　■名古屋音楽学校

2020 50th Anniversary

名古屋芸術大学開
東キャンパス交流テラス「TERA

本学開学50周年記念事業として東キャンパス中庭に建設しておりました「交流テラス」がこのたび完成し、10月31日（土）に渡り初め式を行いました。

音楽領域の在学生によるトロンボーン四重奏が華を添える中、渡り初め式は本学濱田副本部長の進行で、竹本学長の式辞から始まりました。

「本学は開学50周年の記念事業を数年前から複数計画して参りましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により残念ながらすべて中止となりました。そんな中、唯一、東キャンパスの交流テラスの建設が進められ、本日完成を祝い、渡り初め式を行うこととなりました。

この交流テラスは名古屋芸術大学開学50周年事業として相応しいシンボルとなることを目指し、スペースデザインコースの学生による案をベースに、東キャンパスの学生らによる意見も取り入れ、芸術教養の学生と契約助手でプロジェクトを組み、コンセプトからデザインを再考し、建築の専門家である株式会社梓設計の意見を加え、現実的な提案がされたものです。

今後は学生が積極的に活用できる施設として、東キャンパスの魅力を向上させることを願っています。今回の建設にあたり後援会を始め、多くの関係者の皆様にご協力をいただきましたことを改めてお礼申し上げ、式辞といたします」とのご挨拶でした。

次に「交流テラスネーミング募集受賞者表彰」が行われ、最優秀賞（TERA）受賞の加藤進太郎さん、優秀提案者の齋藤伊織さん（Akkord）、下脇寛奈さん（CONNUACT）の3名が紹介されました。3名を代表して加藤進太郎さんが挨拶をされ、会場からは大きな拍手が送られました。

続いて、交流テラス建設に多大なるご尽力を賜った名古屋芸術大学後援会 会長 菊井政右衛門様、明和一級建築士事務所 代表取締役 近藤良樹様、そして、日本建設株式会社常務取締役 執行役員 名古屋支店長 佐久間昭司様に、学校法人名古屋自由学院より感謝状が贈呈され、盛大な拍

交流テラス「TERA（テラ）」は、今まで駐車場や休憩スペースとして利用されていた中庭をテラスと回廊に改修、各建物と繋げバリアフリーを実現しそれぞれに直接アクセスすることができるよう

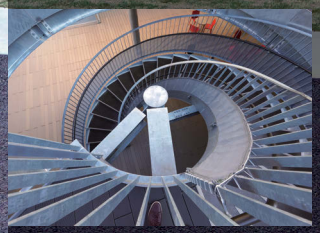
「TERA」
プロジェクトリーダー
片岡 祐司教授

「東キャンパスの魅力を向上させる」計画は数年前から本学の上層部の中にあり、その構想をデザイン領域（当時はデザイン学部）の学生に「何か新しい事ができないかな」と話をしたのがこのプロジェクトのスタートでした。

学生たちと「どうしたらより良いキャンパスになるか」ということを考え、幾つかの提案をしました。その中の１つがこの「交流テラス案」でした。

素晴らしいことに、大学側の事業方針は「学生にすべて考えさせよう、学生主導で進めよう」というものでした。私の役割は学生たちの「こんなキャンパスライフを送りたい」という夢を叶えようとする力を引き出し、実現可能なレベルにまとめていくことで、とても楽しい仕事でした。

私も物を創る仕事に長く携わってきましたが、これだけ大きい構造物に関わるのは初めてで、本日完成した「TERA」を観て、図面以上の大きさ、広がり感があることにとても感動しました。見所である曲線の美しさもよく再現されていますし、上と下の構造で色分けをすることで立体感を出す工夫など、とても良い仕上がりだと思います。



学50周年記念事業
（テラ）」渡り初め式を行いました

手が送られていました。

「謝辞」として、学校法人名古屋自由学院 川村理事長からお言葉がありました。

「本日は東キャンパス交流テラス『TERA（テラ）』の渡り初め式にご参列くださり、誠にありがとうございます。新型コロナウイルス感染を避ける関係でこの場にはいらっしゃいませんが、先程表彰された方以外にも、TERAの完成までにはたくさんの方々のご協力をいただきました」。

総監督の片岡祐司先生（図書館長）、モデル案を作成したスペーズデザインコースの駒井貞治先生（准教授）のチーム、コンセプトを練った芸術教養の茂登山清文先生（教授）のチーム、ロゴマークに関わった則武輝彦先生（准教授）のチーム、そしてこの式典に演奏で華を添えた音楽領域の学生など、川村理事から時間が許す限り一人ひとりお名前を読み上げて労をねぎらうお言葉がありました。

「この交流テラスはオール名芸で創りました。西キャンパスのアートギャラリーを東キャンパスにも持ってくる、東西のキャンパスの連携がより深まるこのアイデアは、実は学生から出たものです。私はこのことをとてもうれしく思っています。このことをご報告し、すべての方々に改めてお礼を申し上げ、ご挨拶といたします」と謝辞を結びました。

式典に続き、「TERA（テラ）」のテープカットが行われ、ネーミング募集受賞者の三方と、後援会長の菊井様、そして川村理事長と竹本学長の6名により、学部や領域を超えた幅広い交流を生み出す名古屋芸術大学のより開放的なキャンパスライフのスタートが切られました。

来場者の皆さんは思い思いにテラスを見て回り写真を撮ったり、プロジェクトに関わった学生たちから説明を聞いたりと、TERAを堪能していらっしゃるご様子でした。

6号館1階のカフェコーナー Akkord（アコルト）ではコーヒー等が振る舞われ、コーヒーを楽しみながら談笑する方々の姿も見受けられられました。

になりました。6号館1階にはカフェコーナー「Akkord（アコルト）」とギャラリースペースを開設、学部や領域を超えた幅広い交流を生み出す開放的なキャンパス空間となりました。

大学展 卒業・修了制作選抜を同日開催

アート＆デザインセンターでは「TERA」の渡り初め式にあわせて東キャンパス「CONNUACT」横にオープンした《東ギャラリー》と、西キャンパスの《西ギャラリー》で『あわいの視点　第2回名古屋芸術大学展 卒業・修了制作選抜』を開催しました。

《東ギャラリー》

《西ギャラリー》

式典に華を添えてくれた音楽領域の皆さん

プロジェクトに参加した学生メンバーたちと語らう竹本学長と川村理事長

芸術学部
芸術学科
2021年度
新領域／
新コース特集

跳び越えるための垣根

BORDERLESS 2021

さまざまな分野の知識や技術が融合し、これまでの価値観が問われ変化し続けているのが現代です。これまでの常識にとらわれず柔軟で多様な考え方を身につけ、新しい答えを見つけ出していくことが求められています。新たな価値を自分で切り開いて創ってゆく。難しいことですが、誰にでもチャンスが与えられている時代ともいえます。

こうした“今”に対応して、芸術学部も変わります。2021年度からは、美術と音楽の領域を融合し横断する舞台芸術領域が誕生します。これにあわせ美術領域も改編され、基礎学習のアート・ファンデーションを導入。さらに現代アートコース、コミュニケーションアートコース、工芸コース、美術総合コースが新設され、さまざまな学びに対応します。また、デザイン領域では、分野を横断する新しい試み“ALPs”が始動。どんなことが始まるのか、担当する先生方にお話を伺いました。

@月灯りの移動劇場

舞台芸術領域

融合するアートの象徴。
あなたが舞台をつくる。舞台に立つだけが、舞台芸術のぜんぶじゃない。

音楽、演劇、舞踏、さらにはオペラ、バレエ、ミュージカル、歌舞伎など、私たちが普段、鑑賞するさまざまな舞台。
それは、演者だけでつくられるものではありません。プロデューサー、演出家、舞台美術家、照明デザイナー、
音響プランナー…、優れたプログラムは、多くの人々の力が集結してでき上がるもの。
名古屋芸術大学は、舞台芸術のつくり手としての実践的なスキルと豊かな感性を本格的に学ぶ
「舞台芸術領域」を新たに開設します。

『アイゥオーラおばさまの家』
月灯りの移動劇場　第３回公演
2017 年 10 月 リンナイ旧部品センター特設野外劇場

美術：浅井信好

「月灯りの移動劇場」主宰。ストリートダンサーとして国内外のコンテストで優勝を重ね、SMAPやサカナクション等有名ミュージシャンのバックダンサーや振付を担当。パリ市立劇場を拠点とする山海塾に参加し、脱退後はフリーランスとしてドイツ、フランス、イスラエルで活動。現在はダンスハウス黄金4422を運営し、創作活動と育成活動を行っている。（2021年度より講師として着任予定）

時代が求めるのは、クリエイティブな新しい発想。一回性

舞台芸術を通して、想像力・創造力を高め、感動を社会に提供できる人材を育成する。

現代社会で求められるもの、それはクリエイティブな発想であり、多様な“芸術との出会い”こそが、そういった想像力・創造力の源となります。舞台芸術の観客、そして舞台の上に立つ演者は「今、ここ」にいる人たちです。そしてクリエイティブな発想を持って「今、ここ」にいる観客と演者の関係性を構築するのが、舞台芸術をつくる人々。舞台芸術領域は、この一回性からしか生まれることのない真の感動を社会に提供できる人材を育成するために誕生しました。

舞台芸術に関する実践的スキルとともに、舞台芸術の発展と社会的課題の解決に向けて、意欲的に取り組める人材へ。

劇場や実演団体の社会的な役割は、素晴らしい作品を提供し、そこで生まれる感動を原動力とした人々の変容によって、社会に刺激を与えていくことだと考えます。舞台芸術領域では、舞台芸術を通して社会をより豊かにすることのできる人材を育成します。

舞台芸術領域 座談会

舞台芸術の未来をここから

2021年、名古屋芸術大学に舞台芸術領域が誕生します。あらゆる芸術分野が融合した舞台芸術のつくり手を育成する、東海地区初の学びの領域です。舞台美術家、プロデューサー、演出家、アートマネジメント研究者として活動する4人の指導陣が、本領域の特長や育成する人材像などについて語り合いました。

舞台美術家 **金井勇一郎**

金井大道具株式会社 代表取締役社長。ニューヨークのメトロポリタンオペラハウスでの研修をきっかけに舞台美術界へ。市川猿之助（現：市川猿翁）のスーパー歌舞伎などを担当。歌舞伎美術にアールヌーヴォーのデザインを取り入れるなど、独自のアイデアで多数の舞台をつくり上げた。2019年度より本学特別客員教授。

舞台監督、プロデューサー **丹羽康雄**

1952年東京生まれ。1976年、多摩芸術学園芸能美術科卒業。同年、財団法人ニッセイ児童文化振興財団（現：ニッセイ文化振興財団・日生劇場）に入社。技術部長、企画制作部長を歴任。2007年～2013年までは企画制作部長と財団理事を兼任。2014年～2020年まで愛知県芸術劇場館長。現在、同劇場アドバイザー。2020年度より特別客員教授。

演出家 **鳴海康平**

劇団「第七劇場」代表。早稲田大学第一文学部在籍中、19歳で劇団を結成。東京やフランスで経験を重ね、35歳で劇場「テアトル・ドゥ・ベルヴィル」を立ち上げ、さまざまな演劇作品の演出を手掛けるとともに、大学等で特別講師として指導にあたるなど教育・育成活動にも注力している。2021年度より准教授として着任予定。

アートマネジメント研究者 **梶田美香**

音楽大学を卒業後、愛知県を中心に演奏活動を展開する傍ら、2005年～ 2010年まで名古屋市立大学大学院で学ぶ。現在は、アートプロジェクトや劇場に関する調査研究、エデュケーションプログラムの企画制作などを中心に活動。また文化行政の委員も歴任。名古屋芸術大学教授。名古屋大学、南山大学非常勤講師。博士（人間文化）。

からしか生まれることのない感動を社会に提供するために。

舞台芸術領域で育む力

日本全国や世界中で活躍する教員から、多角的に舞台芸術を学び、今後の舞台芸術業界を牽引することのできるスキル

社会状況に関心を持ち、状況を俯瞰した上でリーダーシップを発揮し、問題意識を持って文化芸術を通した課題解決に立ち向かう力

チームビルディングやコミュニケーション等を通した、他者への敬意や謙虚な姿勢

これらの力は舞台芸術以外の芸術分野や一般社会でも活かすことができます。

▶向いている人

舞台は人前に出る演者だけでつくられるものではありません。プロモーション活動や現場の制作、音響や照明の演出など、さまざまなスタッフにより、大勢の人々の感動は生み出されます。そのため、「舞台や劇が好き」といった興味は大切ですが、人と協調して何かをつくり上げることが好きな方、「自分が舞台をつくる！」という志の高い方にこそ学んでほしいと思います。音楽・スポーツイベントでの演出や空間に興味があり、スタッフとして好きなアーティストや選手を支えていきたいと思う方も歓迎します。

舞台芸術のすべてを1年次から経験する

梶田：本来、芸術とは音楽や美術が融合した分野です。ただ、日本の多くの芸術大学がその間の橋渡しができておらず、本学もキャンパスが分かれていることもあって、ここに至るまでに時間がかかりました。しかし、ついに音楽と美術が融合・横断した領域が新設されることになり、本学の念願が叶うと同時に、舞台芸術を支える側に興味を持つ学生のニーズにも応えるものと考えています。本領域では1年次に舞台芸術の基礎を総合的に学び、2年次から舞台芸術の成立に不可欠な舞台美術、舞台プロデュース、演出空間の3コースで専門性を養います。ここが学びの特色といえるでしょう。

丹羽：1年次に舞台芸術に関わるさまざまな要素を学べるカリキュラムは、とてもいいと思っています。というのも、作品を上演する際に、演出家やプロデューサーが照明や音響のことをある程度理解しているかいないかで、できあがるものが全く違ってくるからです。私自身も舞台に関わるいろいろな業務に携わってきましたので、舞台プロデュースコースでは、そうした経験をもとに、ものをつくる時の考え方などを伝えていくつもりです。また、照明や音響デザイナーを育成する演出空間コースは、劇場だけでなく、屋外のライブやアートプロジェクトなどにも可能性が広がる分野だと思います。

金井：舞台美術コースでは、脚本を読み、情景を考えてデザインし、自分たちで大道具などをつくり、劇場へ設営し、そこに照明と音響、俳優が入り、演出家の指示によって作品をつくり上げていく、こういった一連の流れを学生に経験してもらおうと考えています。舞台美術とは、デザインや大道具が作品ではなく、そこに照明や音響、俳優が入り、観客が見て初めて完成するもの。そのことを感じてもらうには現場から学ぶことが大事ですので、3年次のインターンシップでは時間をかけて一つの作品をつくり上げたいと考えています。

鳴海：私は演出家、カンパニーの代表として学生と接することになるのですが、4年の間に何より「正しく失敗する」という経験を手助けしたいと思っています。大学で失敗にどう向き合い乗り越えていくのか、その手法や態度を学び、心が折れるようなことに対しても前進する力を身につけられれば、社会に出た時に非常に役に立つと思います。

梶田：教育は理論と実践の両輪で展開していく予定ですが、特に実践については学生にとって最初にふれるものが基準となるからこそ、お三方のように現場の第一線で活動されている先生方に指導をお願いしています。現場の経験ほど価値のあるものはなく、ぜひその空気感をストレートに伝えていただきたいと考えています。

舞台芸術とは人と人がつくり上げるもの

梶田：本領域では、作品をみんなで一緒につくり上げます。自分の専門性を磨き

舞台芸術領域では、1年次に業界常識や舞台芸術に関する基礎を学んだ後、2年次以降は「舞台美術コース」「演出空間コース」「舞台プロデュースコース」の3コースにそれぞれ分かれ、理論と実践から総合的に学んでいきます。そして卒業後、舞台美術家、舞台照明家、舞台音響家、舞台プロデューサー等、舞台芸術に関わる多様な職業につく人材の輩出を目指します。

■舞台芸術領域での4年間の学び

1年次の学び

3コースすべての基礎を全般的に学ぶ時間です。どのように企画され制作されていくのか、どのように舞台芸術は考察されつくられていくのか、どのように照明や音響はデザインされていくのか、また、舞台芸術の歴史や社会的背景、著名な作品、舞台芸術業界の常識等々、さまざまな内容の基礎を学びます。

幅広い知識を身につける貴重な1年間。1年次の学びは、将来、社会に出た時に実はすごく力になるのです！

2年次の学び

コースを選択して専門的に学びます。1年次に比べ、ぐっと専門的になります。舞台芸術コースでは実際に模型や舞台美術セットをつくり、演出空間コースでは専用ソフトの使い方や、機材の操作を学外のホールも使って学びます（音響・照明の両方を学びます）。舞台プロデュースコースでは実際の公演を企画制作します。

専門コースの基礎を身につける1年間。将来、社会で困った時に戻る専門分野の原点は2年次の学び。シンプルだけど奥の深い1年になるはず！

舞台
コー
舞台芸術デ
大道具、小道
劇場での作
舞台美術に関す

舞台
領

演出空間
コース

音響と照明を総合的に学び、
空間デザインにおける実践力を育む。

つつ、人との協働を学べる点にも大きな意義があると考えています。

金井：おっしゃるとおりです。美術にせよ音楽にせよ、基本的には個人の才能が重要ですが、舞台芸術に関しては1人だけの才能が優れていても成立しません。才能のぶつかり合いを乗り越えた時、相乗効果が生まれて新しい創造につながるからこそ、芸術+人間についても教えられたらと思います。

鳴海：人間という観点からいえば、芸術がエッセンシャル（必要）かどうかは、その人が置かれた立場で違うと思います。ただ、芸術という多様な考え方や人間の生き方を保証するという考え方をもとにすれば、変えられるルールや偏見などがあり、多様な分野・層・年代に対して芸術が為せることはたくさんあります。芸術の仕事は、人間を育て守るための仕事ともいえ、本領域の学生には学びを通じて、自分以外の誰かを守ったり、救ったり、豊かにしたりする楽しみを見つけてほしいと思っています。

丹羽：舞台は上演が終われば3時間後には撤収して、その空間には何もなくなってしまいます。いわば、人の心にしか残らないものを、私たちはつくっているわけです。人と人とがつながるからこそできる舞台の仕事の面白さを、ぜひ伝えていきたいですね。

社会に求められる舞台芸術のつくり手を育てたい

梶田：最近は文化GDPが注目され、観客動員数など数値での評価が文化政策でも重視されるようになってきました。その意味では、今後の舞台芸術を担う人材には広い視野で物事をとらえる力が必要です。ただ、数値だけに流されない信念も忘れず、社会に求められる舞台芸術をつくる人材、社会の文化的インフラとして文化芸術を運営する人材、業界を牽引する人材を輩出したいと考えています。

鳴海：今、舞台芸術界は過渡期にあり、10年程前から劇場やカンパニー内の仕事の仕方が変わりつつあります。これまで時代の変化に遅れたり、進みすぎたりと、ある部分でアンバランスだった芸術の世界を、大学で舞台芸術のほか時勢や社会についても学び、変化に対する感覚を身につけた人が良い形に収斂していくのではないかと期待しています。

丹羽：大学はアカデミックなものだからこそ、学生には芸術とは何かということを考えてもらいたいですね。もちろん、具体的な仕事の内容や役割は教えるわけですが、例えばプロデューサーが何をつくっているかといえば、芸術をつくっているわけです。だからこそ、芸術とは何かと考える力を持った人を育てたい。ここでいろいろな基礎を覚えて、やりたいことを見極め、自分の道を切り開いてほ

美術
ース
ザインから
具の製作や、
業全般まで、
るスキルを学ぶ。

芸術
域

舞台
プロデュース
コース
企画・立案や演出・キャスティング等、
舞台プランニングとともに
ビジネススキルを養う。

3年次の学び

演出家との共同作業が本格的に始まります。舞台芸術は、美的に優れたものを演出家の意図に沿わせたり、舞台の大きさや機構に合わせたりしながら、それぞれの担当分野で制作していくことが重要です。また、公演の宣伝やチケットを売ることも大切です。実習が増えますが、実践を支える理論の学びも継続していきます。

インターンシップも含めて、外部の人たちとの関わりが一気に増える1年間。プロのアーティストと共に舞台をつくる貴重な時間です。

4年次の学び

大学生の集大成として、卒業制作公演に向けて領域全体で一致団結して取り組みます。学外の劇場で実施する大掛かりな創業制作公演のため、1年間をかけて準備をしていきますが、それだけではなく、各コースで卒業研究も行い、理論と実践による大学生としての学びを充実させます。

これまでの夢が、卒業後のキャリアとして現実的になっていく1年間。社会人としての振る舞いを身につけ、意識も変わっていきます。

しいと思っています。

金井：確かに研究意欲を持って、何でも自ら取り組める人材を育てたいですね。舞台美術に関していえば、学生の中にはデザイナーだけでなく、手でつくりあげていく温かみのある世界に惹かれて、大道具や小道具の製作者を目指す人、舞台監督になりたいという人も出てくるでしょう。そういう希望も良い方向へ導いていきたいと思っています。

鳴海：もう一つ、先生方がいわれたように、舞台芸術は人間と人間が一緒につくったものを生身の人間に見せるという、非常に特殊な表現文化です。誰かと協力しながら、時に対立しながらチームでベストを探す作業は非常に難しい。しかし、それは一般企業でも必要とされることです。相手と協調しつつ自分のオリジナリティーを加えながら、全員を活かせるような作品をつくることは難しい半面、非常に面白くもあり、作品が誰かの心に届いた時の喜びも大きい。チームでものをつくることに喜びを見出せる人材を、送り出したいと思っています。

広く社会に認められる総合芸術大学を体現するために

金井：本領域の将来を考えると、やはり最初の4年間が勝負です。日本や世界に存在感を発信できる領域・大学を目標に全力を尽くしていきます。また、今問題になっている舞台美術の環境問題に率先して取り組み、地球環境への責任を意識した教育、ものづくりを進めていくことも重要だと考えています。

鳴海：現在、本領域では舞台の技術やプロデュースのコースを設けていますが、今後は違うポジションが加わり、学内の多様なコースが集まってくる可能性もあるのではないでしょうか。いずれにせよ、総合的に舞台芸術を支える人材を育成できる領域へと発展させていきたいです。

丹羽：今後、舞台芸術は音楽や芸居が好きな人だけのものではなく、もっと多くの人々が求めるものにならなければいけません。それには劇場だけで作品をつくるのではなく、社会や人々に対して劇場は何ができるのかを示し、文化として教育や福祉につなげていく必要がある。本領域もそうした広がりを持った場になれば、すばらしいと思います。

梶田：本領域は、名芸が目指す総合芸術大学を体現する領域です。高校生にとって芸術大学への進学は特別な感じがするかもしれませんが、そもそも文化や芸術は生活の営みの中から出てくるものです。これまで絵や音楽、芸居などの経験がなくても舞台芸術を担うことへの興味や関心がある人を受け入れられる、まさに総合的な芸術の領域を皆さんと力を合わせてつくっていきたいと思います。

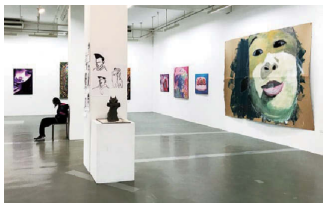
作品の幅と視野を広げるアート・ファンデーション

自己と向き合いテーマを掘り下げるには、まず多様な選択肢を知ることが大切。そこで、1年次からあらゆる表現手法にふれられる仕組みが共通カリキュラム「ファンデーション」です。さまざまな素材・技術の専門知識を持った教員陣、種類豊富な創作メソッドに出会うことで、早い段階から作品の幅を広げます。

絵画以外へのアプローチも多数用意。映像、写真、インスタレーション、批評などを専門とした教員や、ラジオ番組制作、地域の店舗ディスプレイ制作など多岐にわたるプロジェクトを通し、多様な価値観にふれながら視野を広げます。

専門家教員による丁寧な指導とサポート

さまざまな技法や素材・道具に関する確かな専門知識を持った教員が作品制作を丁寧にサポート。漠然としたアイデアやイメージでも、実際にかたちにする際の制作工程や作業ツールについて具体的にアドバイスを受けられるため、創作の方向性が導かれます。また、その過程において素材そのものの魅力や特性も知ることができ、必要な知識や技術を深く体得することができます。



学内外での作品発表の機会

毎年、1年次から3年次にかけて、学内外のギャラリーやアトリエを会場とした「レヴュー展」を開催。そこで1年間の集大成を発表します。そのほかにも各コース主催の作品展や、卒業生を交えたグループ展なども多数開催。社会に向けて積極的に作品を発表し、多くの人の目にふれさせることで「伝える力」を養い、今後の作品制作に活かします。

第一線で活躍する先輩アーティストと接して、これからのキャリアを描く

■ HEIGEN（シリーズ平原）

美術領域の教員や、外部からゲストを招いて行われるトークイベント。第一線で活躍するアーティストを月1、2回のペースで招き、世界のアートシーンの動向や、これからのアートに求められること、制作現場から発表の場に関する様々なスキルやノウハウなどについて直接話を聞くことができる機会です。

■ OHOC（オーホック）

在学中の4年間で100名のクリエイターに出会い、卒業時には自分が101番目のクリエイターになることを目指す講座「OHOC（One Hundred & One Creators）」。さまざまな分野で活躍する多彩なクリエイターを招き、その考えや活動にふれることで、創作者・表現者としての生き方の幅を広げていきます。

松岡徹 准教授

彫刻、版画、絵画、写真、ワークショップ等、特定の手法にとらわれない幅広い表現技法を駆使して作品を制作。作品はどこか不思議でユーモアにあふれ、とぼけた味わいの異世界へと誘う。自己表現に加え、社会に必要とされるアートの役割を意識し、佐久島での展示など、社会に対してアートの可能性を広げる活動も行う。

これまでアートクリエイターコースでやっていたさまざまな美術の基礎を体験するファンデーションを、美術領域全体へ拡大します。平面、立体、版画、陶芸、ガラス、現代アート、映像……と、ただ知るだけでなく、実際にふれて体験するカリキュラムです。実際にふれることで、何か発見もありますし、他コースの同級生との違いを感じることで自分の適性について認識することも期待しています。また、他のコースを知ることで、自分のやりたいことを広い選択肢から見つけ出し、転籍を含め適切な判断ができるようになればいいと思っています。それから、ファンデーションにはデジタルにふれる内容も入っています。現在、絵筆を使った絵画や彫刻に向かう学生は、デジタルを苦手にしている傾向があります。Webを使って発信することが一般的になってきた現在、日本画や洋画を志向する場合でも、自分がキャンバスに描くこととデジタル表現との対比や距離感は非常に重要です。そうしたことをつかんで欲しいと思います。また、アートクリエイターコースでは、先輩や社会で活躍するアーティストやさまざまな職業の人を迎え話を聞く「OHOC（オーホック）」を続けてきました。このカリキュラムは継続し、さらに洋画コースで行われている「HEIGEN（シリーズ平原）」と合わせ、多くの先達たちから刺激を受け、自分の将来をイメージして欲しいと考えています。

芸術学部 芸術学科
美術領域

現代アートコース

「いま」と向き合い未来への道をつくる

アートや作品制作に関する、高度かつ専門的・体系的な知識と技能の習得を目指します。これまでの美術史を学び、技法を幅広く習得しながら「いま」と向き合い、数ある作品制作の過程から、未来への起点となるアーティストとしての価値観を形成していきます。プロデュースやマネジメントなどの方法論を学び、ゲストによる講座、学内ギャラリーでの展示企画などを通して、主体性と創造性を持つ人材を育んでいきます。また、未来への最善の道を探るため、さまざまな分野の表現を複合的に取り入れながら、自らが理想とするゴールに向けて粘り強く探求し行動する力を養います。

撮影／城戸保

田村友一郎 准教授（写真左）

既存のイメージやオブジェクトを起点にしたインスタレーションなどを手掛ける。従来の美術の領域にとらわれない独自の省察の形式を用いて、特権的な現代美術の観客へのメッセージを意図するだけでなく、観客との間に生じる特異なコミュニケーションを志向する。

吉田有里 准教授・アートコーディネーター（写真中）

2010年、2013年のあいちトリエンナーレでは、まちなか展示の会場である長者町エリアを担当。2014年より、名古屋港エリアを拠点とするアートプログラム「MAT, Nagoya」とアートフェスティバル「アッセンブリッジ・ナゴヤ」の共同ディレクターをつとめる。

秋吉風人 准教授（写真右）

大阪、ベルリン、愛知と拠点を移しながら、世界各地で作品を発表。描くという行為への執着と共に「絵画」という概念の解体と再構築を実験的に続け、複数の絵画シリーズとして展開している。

中学、高校で教えられている美術教育と、現在わたしたちがアートとして捉えているものとの間には大きな乖離があります。現代アートというと難しく聞こえるかもしれませんが、映像やマンガ、アニメーション、ゲームなど今の時代を反映するさまざまな表現をも受け入れるコースになると思います。アートは常にアップデートされるもので、現在のタイミングでアートを通して何ができるのか、またどのように世界とつながっていくかを考えるコースともいえます。

作品を制作するための技術や手法の習得に加え、作品を言語化して伝える力、素材の選択や展示の方法などの作品の見せ方についても知識を身につけて欲しいと思います。展覧会を行うためには、企画・キュレーション、コンセプトやテーマ、空間と配置の検討、広報、記録、出版など様々な要素が交わり、多くのプロフェッショナルが関わります。それらも視野に入れ、発表の場や美術に関わる仕事についても意識を向けられると良いですね。また美術を学ぶことで得た知識を様々な場面で社会に役立てて欲しいです。

今まで日本の芸術大学では、主に日本画、洋画、彫刻という枠組みが置かれてきましたが、現在のアートはそれらに収まらず、映像、写真、インスタレーション、パフォーマンス、批評、展覧会企画など様々な選択肢があります。高校までの教育の枠組みではいまだに美術＝絵画というイメージが強いですが、現代アートコースでは従来の枠組みにとらわれず、制作する内容によって、あらゆる素材やメディア、アートの歴史や文脈を知ることで、まずは選択肢の幅を広げたいと思っています。

芸術学部 芸術学科
美術領域

コミュニケーションアートコース

アートの力で人をつなぎ、社会をもっと幸せにする

アートの力で人と人を結び、社会のニーズに応える「ものづくり」ができるクリエイターを育てるコースです。彫刻、立体造形、フィギュア、人形制作、版画、平面など多様な表現を学びながら、造形力と創造力を身につけます。自分の持つアートの可能性を発見し、社会をより豊かにすることができるプロのクリエイターを目指します。

松岡徹 准教授

自己を表現するというのが作家ととらえられていますが、自分の持っている技術や感性を社会のために役立てたいと考えるシーンは多く、そう考えて創作する作家もたくさんいます。これまで接してきた学生にも、自分が学んできた能力を社会で発揮して活躍したいと考える人がたくさんいました。これまでの美術教育は、作家である先生が作家志向のある学生を教えるというスタイルで、作家としての仕事をするためのものでしたが、もっとストレートに社会とつながり、作品で世の中を良くしたいというようなことを学べる場があってもいいのではないかと考えています。コースの特徴としては、立体を学ぶことができるということもあります。比率でいえば、立体7、平面3といったカリキュラムになります。社会の役に立つという観点では、デザイン領域でも同じような考え方が広がっていますが、デザインでは紙媒体を担うことが中心です。立体はデザインではなくアートが担う領域で、アートの仕事が実は世の中にたくさんあります。そうしたニーズに応えられるクリエイターを育成するコースです。

芸術学部 芸術学科
美術領域

工芸コース

「素材」を生かし自分と世界がつながる方法を探る

制作過程で表情が変化する陶芸やガラスという素材と向き合いながら、独自の表現世界へと導きます。どのように思いや考えを実現すべきか綿密な対話を重ねて、デジタル化の進む現代においても手でつくることの意味を問い続けながら自己表現を追求し、世界とつながる方法を見つけます。

松岡徹 准教授

もっとも重要なことは、クラフト系であるメタル&ジュエリーデザインコース、テキスタイルデザインコースと連携しながら進めていけることだと思います。陶芸とガラス、メタル、テキスタイルも、作家性とデザイン性という2つの要素が両輪のように存在する分野といえます。クラフトと工芸の両方を学び共同で提案することや、アート的な思考で展覧会などにもつながればと期待しています。教員同士で話し合いも進んでいるようで、領域を横断するような刺激的な動きが出てくるだろうと楽しみにしています。美術領域の学生、デザイン領域の学生がそれぞれのファンデーションで基礎を学んでからになるので、ベースになる考え方が異なる学生が混ざり合い協働することで、これまで以上に自由な発想のものが出てくるのではないかと思っています。

芸術学部 芸術学科
美術領域

美術総合コース

「自分の可能性」を探し個性あるクリエイターになる

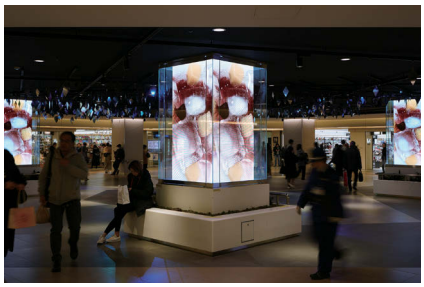
絵画、彫刻、版画、工芸など幅広い美術の考え方と基礎的な技術を学び、自分のやりたいこと、できることを探求します。2年次以降は、他の専門コースに移ることも、美術総合コースのまま、美術領域の多様な専門コースの中から身につけたい技術や知識を選択して、自分らしさを発揮するクリエイターを目指すこともできます。

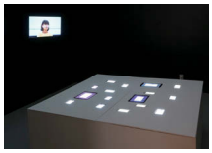
松岡徹 准教授

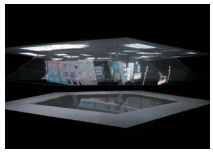
美術総合コースは、コース独自の授業があるわけではなく、他の専門コースで行われているカリキュラムを選択し自分なりのクリエイターを目指すコースです。一方で、将来自分は『何になりたいのか』『何をやりたいのか』ということで迷っている学生がたくさんいます。何に適性があるのか、これまでもアートクリエイターコースで体験しながら見つけるということをやってきましたが、現代アートを含めた美術全体、さらにデザインや舞台芸術という領域も含めて視野を広げ、その中から考えていければいいのではないかと思います。進む方向が明確になった場合、専門の選択を行いますが、転籍しないで美術総合コースのまま卒業してもかまいません。ただし、卒業制作を行うので制作スペースを確保する必要があります。日本画の画材を使うのなら日本画コースに近い場所、油絵なら洋画コースに近い場所となると思います。したがって、4年生になる頃にはいずれかのコースを選択することになると考えています。美術総合ならではのこととして、従来とは異なる材料を扱ったり、作り方をしたりすることが出てくると思います。これまで専門の範囲の中では、イレギュラーな存在のため認められにくいものでしたが、時代性や社会性を考えれば大きな可能性を秘めているといえます。こうした学生の後押しをして美術の固定概念を揺さぶる。そんな役割も美術総合コースにはあるのではないかと考えています。

芸術学部 芸術学科
デザイン領域

先端メディア表現コース







「最先端のメディア」を駆使した高度なものづくりの表現者を目指す

デザイン、映像、メディアを横断するテクノロジーを学びます。デザイン分野では、さまざまなデザインに役立つ素材の研究を行います。映像分野では、特殊撮影、モーショングラフィックス、編集、配信のプロセスを学びます。メディア分野では、コンピュータと人間を結びつけるインターフェースの制作を学びます。3つの分野を交錯させ、アナログとデジタルの表現を分け隔てなく学ぶことで、変化し続ける社会を柔軟に生き抜くスキルを磨きます。また、デジタルファブリケーション工房（仮称）でさまざまな素材を使った新しい「かたち」のデザイン、プロジェクトを進めていきます。

デジタルファブリケーション工房

自由なものづくりの可能性を広げることを目的に、西キャンパスに新設されます。3Dプリンターやレーザー加工機に代表されるようなデジタルファブリケーションツールの利用を促進し、アイデアを素早く具現化。また広く社会や企業とものづくりの場としてつながることも目的とします。

レーザー加工機

3Dプリンター

CNCフライス

竹内創 准教授

これまであまりメディアとしての位置づけをされていない事柄に「メディア」としての評価を与え、作品として制作することで、新旧のメディアのありかたに対する認識を広げることを目標としている。

現在のメディアデザインコースから生まれ変わり、最先端のメディア表現を追求していきます。デザイン、映像、メディアの3つの柱に分け、1年次からファンデーションとともにコースに特化した授業を行います。映像は、現在もメディアデザインコースでやっていますが、さらに特殊撮影、スタビライザーやジンバルを使った撮影やドローンを使った撮影など、各種撮影機材を導入し、さらにCGや映像の加工、モーショングラフィックなど、編集も考え合わせて充実させます。また、映像を発信することが簡単にできるようになってきている現状もあり、映像を発信するところまで含めてやっていこうと考えています。

メディアの部分は、プログラミングもやりますが、人とコンピュータの接点になるインターフェースのデザインが近いかもしれませんね。インターフェースといっても単なる操作系だけでなく、例えばお客さんの動きに合わせて映像コンテンツが変わったりするようなことなどが挙げられます。それから電子工作もやっていきます。ものづくりについても大切に考え、その部分も特徴づけていきたいと思います。声や音に反応するインターフェースであるとか、UI（ユーザーインターフェース）、UX（ユーザーエクスペリエンス）のデザイン、ARやVRなども特化してやっていきたいと思います。

もう一つ、デザインテクノロジーということで、デジタルファブリケーション工房が4月からできます。レーザー加工機や3Dプリンター、CNCフライスなど、いくつか工作機器を入れ、デザインとものづくりのシステムをつくっていこうと考えています。新しい素材を使って何ができるか、実験的なこともやっていこうと思っています。

ALPs（超域創造プログラム）始動

ALPs（Applied-design Leading Programs）とは、第一線で活躍するディレクター陣のもと、専門分野、学部、大学院、学年を超えて参加できるプロジェクト型の実践的プログラムです。現代社会のさまざまな課題に対し、他の学問分野や企業・自治体等とも超域的に連携しながら、デザインの知と技術で立ち向かい、より良い未来の創造を目指します。また、プロジェクトを通じて、次の時代に必要とされる高度なデザイン人材を養成します。

◆プロジェクトの条件

超域的な視点、新規の価値提案を含んだ挑戦的な内容を持つもの

Reserch through practise ＝実践的であると同時に学問的知にも接続されていること

- 海外の大学などの機関との連携プロジェクトも積極的に進め、本組織との関連で新たなパートナー校を持つことも視野に入れる
- プロジェクト・研究期間は、半期型／1年型／持続型（複数年引継ぎ型）を想定する

◆学生メンバーの体験内容、卒後進路、期待職能など

ディレクター、ALPsボードメンバー、マネージャーとともに、実践的なデザインプロジェクトを推進します。従来の実技教育カリキュラムの慣例であった、あらかじめ準備された課題にある仮定された答えを出す形式ではなく、ひとりの自立したメンバーとして、他のメンバーと協調しながら課題自体を探り、設定し、実社会へと投げかけていく体験を積みます。課題・価値発見のためのリサーチから、最終的な提案・社会実装までの過程を一貫して体験することで自らの強みを認識し、充分に活かしながらプロジェクトへと関わります。

萩原 周 教授　写真 2

ALPsは、これまであったような時限的なプロジェクトではなく、持続的に成長し続けていけるものにしたいと考えています。芸大が持つ知的財産、教育資源を、企業や自治体と連携して課題を解決するだけでなく、課題そのものを見つけ出し提案していく運動体のようなものとして位置づけたいと思います。ALPsへの参加についても、教員、学生という枠組みではなく、知識や経験の違いはあれど同列の立ち位置で、また外部から領域にこだわらず必要な人材を招聘し、そこへ学生も参加していくようなかたちとします。プロジェクトにあわせて、適切な人材をスカウトすることができればと思います。学年を越え、学部も超え、ゆくゆくは学校を超えていくかもしれません。ALPsがバリューを持つように育っていけばそうしたこともあり得ることですし、名芸のデザインのアイデンティティになっていく可能性もあります。それくらいのスケールで位置づけています。

駒井 貞治 准教授　写真 5

デザイン領域で新しい分野を探すことを考えています。今まで何か新しいコースを作るというと、マンガがないからマンガコースとか、ファッションがないよとか、デザインという範疇の中で新しいコースを考えるという方法でした。ALPsは、そうじゃないものをつくれないか、何か新しい枠組みそのものをつくれないかということで考え出されました。ただ、いろいろな大学がやっている4年間で2つの専門を取るダブルメジャーや、従来からの専門を究めるということではなく、今までカテゴリ分けされていなかったところに新しいものがあるのではないかということになり、そうした部分を見つけ出していける仕組みを考えました。デザインと考えられてきた範疇をさらに外部へ拡張させることなので、デザイン以外の領域の人と結びつき、そうしたつながりの中から新分野を生み出していくことをやっていきます。

水内 智英 准教授　写真 4

きっかけは、芸大、美大系のデザインはこの先どこへ向かうのかという危機感から来ているのではないかと思います。現在、世界的に見ても急激にデザインの対象が広がってきていますし、そこへ参加するプレイヤーも広がってきています。これまでの芸大系のデザイン教育が得意とする部分とそうではない部分があります。最終的なアウトプットをつくり出すことや、プロジェクトベースで実験的な試作をしながら成果物を作りだすことには向いていて強みがあります。しかし、他の分野とつながって新しい領域を開いていくことは得意ではありませんでした。デザインが持っている価値を社会の中で役立てる、こちらからもっと社会へ働きかけることで、デザインが持っている価値そのものを探ることになるのではないかと思います。

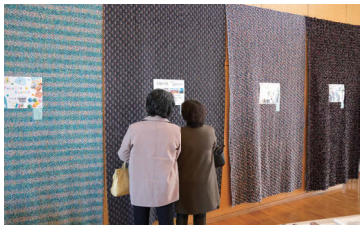
竹内 創 准教授　写真 3

何か知らないこと、全然やったことのないことに取り組んでみたいですね。領域を超えて、さまざまな学生が集まるだけでも新しい刺激になるのではないでしょうか。教員にとっても同じで、領域で閉じているよりもさまざまな人が集まってくることで面白いことができるのではないかと思います。それを、プログラムとしてやっていこうという試みです。デザインでは、フューチャーデザインといった新しい分野を模索する動きが出てきています。これまでのとらえ方だけでは限界があり、デザインという領域自体が動いていかなければならないと思います。ものをつくるだけでなくネットワークをつくることなど、そういった部分も開拓していけるようにと思います。

臼井 拓朗 講師　写真 1

ALPsのメンバー全員が同じ価値観を持ってるわけではなく、学生も含めていろんな価値観を共有しながら、また別の価値観を理解して、そこから新しいものが生まれてくるのではないか、また、そのほうが面白いのかなと思っています。教員というか、参加している自分たちが楽しくないと面白いものは出てこないのではないでしょうか。楽しんでいる時に偶然出てきたものが、もしかしたらこれまでとは全然違うものだったりするのではと思っています。これまでの大学教育の、こういうものをつくりましょう、できました、という図式とは全然違ったものになるのではないかと期待しています。自分としてはどういう立ち位置で参加できるか、このことも楽しみにしています。

名古屋芸術大学
産学官連携
プロジェクト
Vol.6



あま市七宝アートヴィレッジのデザインプロデュースを行いました

今回のプロジェクトは2019年度の北名古屋市の翔龍念珠堂とのコラボに続く、扇千花教授と米山和子准教授による「デザインプロデュース」授業の2回目で、世界的に評価の高い“尾張七宝”の情報・文化の発信拠点である「あま市七宝アートヴィレッジ」のデザインプロデュースを行いました。

プロジェクトの成果物は、2020年11月27～29日に行われたあま市主催の「尾張七宝新作展」の期間にアートヴィレッジで発表・展示されました。

同新作展では、本学メタル＆ジュエリーデザインコースが2019年度から取り入れた産学連携「尾張七宝」の授業で創った帯留めを中心とした七宝作品や、同じ「尾州」の伝統文化としてテキスタイルデザインコースによる毛織物作品など、学生の自由な発想と産地の確かな技術が融合したすばらしい作品が展示されました。

デザイン領域内でコースを横断して20名以上の学生が参加

「デザインプロデュース」授業のテーマである「大学近郊のクラフト特産品をどうプロデュースしていくか」という命題に加え、今回は「来館者数を増やしたい」「七宝焼を若い世代に広めたい」という七宝アートヴィレッジさんからのオーダーに応えるべく、大学や院から、デザイン領域内でコースを横断して20名以上の学生が参加しスタートしました。

コロナ禍で学ぶ「SDGs」「尾張七宝の文化」

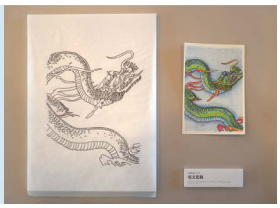
対面授業自粛期間中も授業を工夫、「エシカル消費」についてフェアトレードで著名な原田さとみ氏による講義や、加藤芳朗氏（尾張七宝 伝統工芸士、加藤七宝製作所3代目代表）による「工房のバーチャル体験」等、有意義な講座をオンラインで提供。学生も各自プロデュースのため、リサーチの努力を怠りませんでした。

6月に対面授業が再開してからは、アートヴィレッジさんにご協力をいただきながら実体験中心の授業となり、実際に七宝制作をしたり、歴史も知った上で、現在どのようなものが売られているかを確認したりして、若い感性で「もっとこうしたらいいのでは」といった意見交換をチームで行い、プロデュース案を練り上げていきました。

採用作品紹介

七宝ぬりえはがき

はがき表面には作品の簡単な解説文がつき、自分で着彩することで作品への理解と愛着が自然と深まる。11種類を提案して6種類が採用された。



七宝焼 擬人化キャラクター撮影用パネル映えスポット

高尚なイメージが先行しがちな芸術作品の声を聴く、作者に思いを巡らす「鑑賞眼」をもつきっかけを子供達に与えられそうなアイデア。

小林弘昌館長に伺いました

若い学生さんならではの、私達では思いつかないというか、避けて通ってしまうような、柔軟で斬新な発想がよかったです。採用したぬりえや擬人化キャラクターのアイデアも、流行の知識や発想は私達に全くなかったわけではないのですが、それを「試しにやってみる」ためのスキルや「やってみよう」とするエネルギーが芸大生らしく、とてもすばらしいと思います。

その他の企画もすぐに実行できるものばかりで、名古屋芸大さんとのコラボは正解だったな、と満足しています。

プレゼン作品が採用された学生へのインタビューや、尾張七宝新作展での展示作品は、こちらでご覧いただけます。

Close up! Special

進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-ism

第15回　翔け！二十歳の記憶展

「翔け！二十歳の記憶展」はCBCが主催する、本学、愛知県立芸術大学、名古屋造形大学の学生を対象に、次世代の才能を発掘、支援することを目的に行われている展覧会です。15回目の2020年度では、グランプリを含め5名の学生が受賞しました。

アートクリエイターコース 4年
小栗 みずきさん

グランプリ

「children once wanted be wizard.」

－受賞おめでとう！

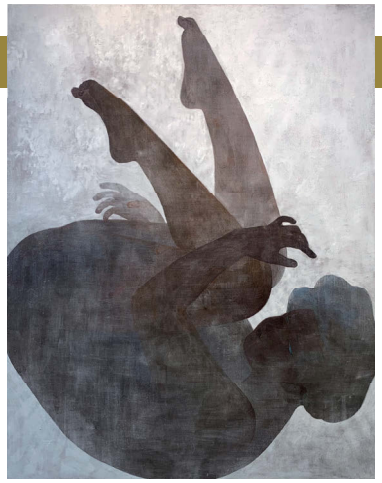
自分で気に入っていた作品をリメイクしたものです。自分にとって大切な作品だったので、受賞できて本当に良かったです。あまり外部の展示はやってこなかったので、それだけでも嬉しかったのですが、受賞できてすごく驚いています。自分ではまだまだと思っていますが、ステップアップになりました。

－今まで外部の展示はあまりやってこなかった？

そうなんです。立体をやるか、絵画をやるか、作風に関しても迷走していました。いろいろ試して制作していて、展示することはあまり考えていなかったんです。自分の想像する世界をどうしたら上手く表現できるか迷っていました。3年になってからアクリルで絵を描くようになり、これで良かったんだと励みになります。将来、立体でも平面でも、何かを作り出す作家になれたらいいなと思っています。

－なるほど、思っていることが絵画のほうが上手く表現できたと。

これまで、現実に自分に起きたことだとか、ショックを受けたことだとか、どちらかというと負の感情をなんとか作品にするという制作の仕方でした。でも、これから先も制作していくことを考えると続けられないんじゃないかとか、コロナで家にいて自分について見つめ直す時間ができ、世界が大変なことになっている中、自分も悩みながら制作していることとか、すごく辛くなってきて、一旦、作り方を見直さなきゃいけないと考えました。そうして自分の創作意欲の源を考えてみると、世の中にあるたくさんの作品が持つエネルギーかなと思いました。それぞれの作品が創作のエネルギーを持っていて、それが見た人の意欲につながっているのではと。私が何かを見て感動したり、自分も作りたいと思ったりするのは、その力を受けてなんです。作品を制作している作家さんたちも、これまでに制作された作品たちからそういうパワーを得ているんじゃないかと思うんです。そのエネルギーみたいなものを表現できたらいいなと。自分もその魔法のような力の一部になりたい、そんなことを考えています。



15回記念賞

「自沈」

日本画コース
4年
安藤 祐実さん

CBC賞

「例）〇」

アートクリエイターコース
4年
森田 和歌奈さん

大学院音楽研究科 器楽専攻 2年
豊田 萌さん
ピアノ部門Age-U第1位

第21回　大阪国際音楽コンクール

年齢上限がなく、ジャンルが豊富で、民俗楽器やアマチュア部門もある2000年にスタートした総合音楽コンクール。テクニックはもちろん、音楽性、将来性を重視するこのコンクールで、本学大学院音楽研究科 器楽専攻2年の豊田萌さんが受賞しました。

第21回大阪国際音楽コンクール第1位
受賞記念　豊田 萌 ピアノリサイタル
（本公演は定員に達したため、受付を締め切らせていただきました）

シューマン：ピアノソナタ 第1番 作品11
嬰ヘ短調 第1楽章
（全国ピアノeコンクールより）

「スクリャービン：ピアノソナタ第4番 嬰ヘ長調 Op.30」

－大学院東京分室の第一期生なんだ。

大学を卒業して、一度社会へ出まして、ピティナ（一般社団法人全日本ピアノ指導者協会）の関連会社である東音企画で働いていました。それと同時にピアノを教えているうちに、学生時代、先生がおっしゃっていたことの意味が実感としてわかってきて、もう一度しっかり勉強したいなと思うようになりました。大学時代に師事していた横山幸雄先生、川田健太郎先生から教えていただけるということで、悩みましたが思いきって決めました。

－大阪国際音楽コンクールの他にもいろんなコンクールで入賞してるね。

大学院の最後の年なので、出られるコンクールはできるだけ出ようと思っていました。大阪国際音楽コンクールの本選で演奏したスクリャービンは、自分のレパートリーではなかったのですが、大学院にいる間に、ロシアに留学されていた川田先生からロシアの曲を学びたいと思いプログラムに入れました。ですが、本番できちんと弾けるかどうか不安で、棄権する夢を2回見ました。でも、本番でピアノの前に座ると、なぜだか落ち着いて、いけると。

－そんな気持ちになるんだ！

初めての経験でした。自分の頭の中で鳴ってる感覚と客席側の感覚がマッチして、そうしたら受賞できた、みたいな…。聴く人と『この線で合っているよね』と確かめながらやっていたら、なぜだかつかめたという感じです。夏に行われた、とあるコンクールの審査員の方が、結局は客席にいる人とのコミュニケーションだというようなことをおっしゃっていて、どういう意味だろうと思い、試してみた本番でした。自分ではこのような形にして表現しようとしているものが、果たして求められているものだろうかと考え、ちょっとしたアクセントや遊びを加えたりしました。自分でも面白かったです。

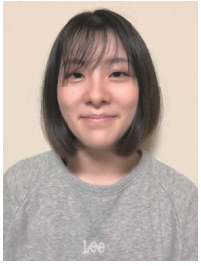
－今後は？

演奏家として表現することとピアノを教えること、この2つに取り組んでいきたいと思います。

審査員特別賞
「現代のポージング」

アートクリエイターコース
4年
林 和奏さん

名古屋市教育委員会賞
「ロートレックとオリーヴ園と」



洋画コース
4年
髙島 朋子さん

マスター to アーティスト

【第51回】

＜ モノの魅力 ＞

Regal wing tip shoes / 2018
h40×w29.5×d20cm
リーガルとコラボレーションした作品
photo：尾崎芳弘

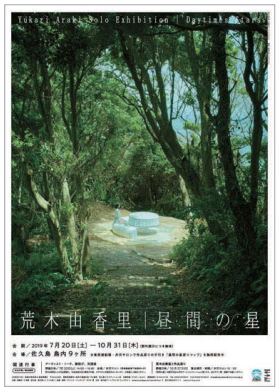
Yellow / 2018
h180×w200×
d50cm
photo：尾崎芳弘

荒木由香里
（あらき　ゆかり）

yukariaraki_artwork
WEBサイト yukariaraki.com

美術領域　アートクリエイターコース　非常勤

1983年　三重県生まれ
2005年　美術学部造形科造形選択コース卒業
2006年　研究生修了



佐久島での個展
「昼間の星」ポスター
2019
デザイン：白澤真生
photo：尾崎芳弘

Red / 2018
LOKO GALLERY 個展のインスタレーションビュー photo：尾崎芳弘

個展

2007年　荒木由香里展（伊勢現代美術館／三重）
荒木由香里展（アイン ソフ ディスパッチ／名古屋）
2008年　荒木由香里展「海ヨリキタリテ」（弁天サロン/佐久島、愛知）
荒木由香里展（アイン ソフ ディスパッチ／名古屋）
Tiny tiny garden（足助病院／愛知）
2009年　waltz（studio J／大阪）
2010年　circus（アイン ソフ ディスパッチ／名古屋）
2011年　Epistemology（アイン ソフ ディスパッチ／名古屋）
あいちアートプログラム「星を想う場所」（新谷海岸、弁天サロン／佐久島 愛知）
Constellation（studio J／大阪）
2012年　Category（アイン ソフ ディスパッチ／名古屋）
APMoA Project ARCH 何ものでもある何でもないもの（愛知県美術館／名古屋）
2013年　Existence（アイン ソフ ディスパッチ／名古屋）
2014年　すべてのものの半分はイメージで出来ている。[島とハイヒール]（アイン ソフ ディスパッチ／名古屋）
2015年　F、その周辺。（アイン ソフ ディスパッチ／名古屋）
2016年　眼差しの重力（LOKO GALLERY／東京）
2017年　星を想う場所（佐久島／愛知）
2018年　落ちた、羽スキップ。（アイン ソフ ディスパッチ／名古屋）
荒木由香里展（ショコラトリータカス／愛知）
2019年　昼間の星（佐久島／愛知）
荒木由香里展（ショコラトリータカス／愛知）

主なグループ展等

2012年　+プリュス：ジ・アートフェア003（スパイラル／東京）アイン ソフ ディスパッチより出品
ART NAGOYA 2012（ウェスティンナゴヤキャッスル／名古屋）アイン ソフ ディスパッチより出品
アートをおうちに持ち帰る。新しくて、楽しくて、温かい毎日が始まる。展（銀座三越画廊／東京）
View（アートラボあいち／名古屋）
大イタリア展 Viva italia!（心斎橋スタンダードブックストア、studio J／大阪）
アート京都 2012（ホテルモントレ京都／京都）アイン ソフ ディスパッチより出品
2013年　The ART Museum（ミッドランドスクエア／名古屋）
-現代美術は今-SEVEN TYPES（松坂屋名古屋店美術画廊／名古屋）

「若者の〇〇離れ」というフレーズを耳にして久しい。〇〇には、音楽、ファッション、クルマ……、ときに恋愛や結婚など、そんなことないのではと思うような事柄も加えられる。いってしまえば３０年前のバブル期から市場規模が小さくなったものをあげつらっているだけなのだが、挙げられているモノたちの本質的価値は変わっていないものの、市場的な価値は下がり続けているといえる。例えば音楽。３０年前、気に入った一曲を聴くためには、ＣＤを買うかレンタルしてコピー。いずれにしてもそれなりの費用がかかった。シングルカットされていないアルバムの曲ならなおさらだ。ところが、音楽が配信になり曲単位で販売されるようになって金額は下がり、さらにサブスクリプション１曲あたりの単価は安くなる一方である。今ではYouTubeでたいていの曲は無料で聴けてしまう現実もある。音楽が人に働きかける本質的な価値は変わっていないはずだが、市場的な価値は目減りしてしまった。音楽に限らず、他の領域でも似たり寄ったりで、情報と物質のどちらも市場的な価値は一方的に下がり続けているといえる。このことの裏返しに、生演奏を聴いたり、現場に赴いて実物を見ることなど、体験価値は向上し続けている。コロナで停滞してしまった１年だったが、モノとヒトとのかかわり合いはゆるやかに変わり続けている。前置きが長くなってしまったが、荒木さんの作品を見ると、モノとヒトの関係を考えさせられる。さまざまなモノがその価値で分けられるのではなく、純粋に色と形によって集められ、ひとつの作品を形成している。繊細で美しく、ときにユーモラスであり、グロテスクな部分もある。作品となったモノたちと人間の関係性の記憶のようなものも立ちのぼる。

「小さい頃から収集癖があって、気になったら何でも集めるんです。雑貨が好きなんですが、雑貨といっても、おもちゃだとかかわいいものだけでなく、自分では使わないライターやろうそく、石だとか、とにかく気に入ったものは集める、そんなふうだったんです」。

荒木さんは、「アサンブラージュ（仏語で、寄せ集め、組み合わせることの意）」という雑多な日用品や工業製品、廃品などを寄せ集めて立体作品を制作している。多くのアサンブラージュの作品は、廃物から利用されることもあり、ジャンク・アートとして捉えられ、美しいものというよりも社会に問題を喚起させるような作品になりがち。ところが荒木さんの作品は、そうした作品の対極にあるような、高い完成度と美しく静かな佇まいが目を引く。「学生時代、私が在籍した当時は彫刻科ではなく造形科だったんですが、在学中も木を彫ったり石を彫ったり、粘土をこねたりっていうタイプではありませんでした。自分に合った素材を探すようなコースで、それらを使って空間表現をする作品を制作していました。夏休みにレディ・メイド（大量生産の既製品

Red / 2015
h175×w360cm
photo：尾崎芳弘

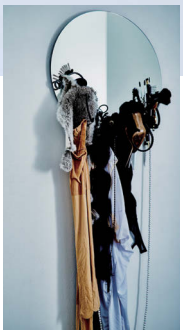
Euclid / 2018
h65.5×w28.5×d18cm,
h43×w25×d15cm
photo：尾崎芳弘

Curtain of swans / 2015
名古屋市芸術創造センター
インスタレーションビュー photo：城戸保

粗品　little gift / 2015
豊川信用金庫旧いなり支店
インスタレーションビュー

Pink / 2012
h56×w53×d18cm
photo：尾崎芳弘

新月のハイヒール / 2019
h18.5×w23×d9cm
photo：尾崎芳弘



F / 2015
h180×w62×d15cm
photo：尾崎芳弘

女性アーティストたちの視点（阪急うめだ本店、アートステージ/大阪）studio Jより出品
解ける魚-現実のつづき-（京都精華大学ギャラリーフロール、ギャラリーパルク / 京都）
2014年　7TYPES×2（松坂屋名古屋店美術画廊/名古屋）
ジ・アートフェア+プリュス−ウルトラ（スパイラル/東京）アイン ソフ ディスパッチより出品
ASIA HOTEL ART FAIR SEOUL 2014（Lotte Hptel Seoul/韓国）COHJU contemporary artより出品
名古屋芸術大学OBOG展（Art&Design Center/愛知）
Affordable Art Fair Singapore（F1 pit building/シンガポール）Ohshima fine artより出品
Affordable Art Fair Hong Kong（HHKCEC/香　港）Ohshima fine artより出品
ASIA HOTEL ART FAIR HONG KONG 2014（arco Polo Hong Kong Hotel / 香港）COHJU contemporary artより出品
大ドイツ展 Grossartige Deutschland Aussetellung（studio J/大阪）
2015年　ジ・アートフェア+プリュス−ウルトラ（スパイラル/東京）アイン ソフ ディスパッチより出品
ART NAGOYA 2015（ウェスティンナゴヤキャッスル/名古屋）アイン ソフ ディスパッチより出品
佗寂島（HANGAR H18/Brussels）
連茎する現代アート（名古屋市芸術創造センター/名古屋）
あいちアートプログラム 豊穣なるもの-現代美術 in 豊川（豊川信用金庫旧いなり支店/豊川）
三重の新世代 2015（三重県立美術館/三重）
2016年　2015年度魅力発信事業成果展　リフレクション（岐阜県現代陶芸美術館/岐阜）
ヨッちゃんビエンナーレ 2016 コラージュ・キュビズム（Cap Studio Y3/兵庫）
愛知からの発信・発進（市民ギャラリー矢田/愛知）
Sky Over Ⅲ（アートラボあいち大津橋/愛知）
2017年　International workshop "DRAWING" inHannover（Galerie Rode und Lanfer/ハノーファー、ドイツ）
遭遇するドローイング　ハノーファー ×名古屋芸術大学 2017（Art&Design Center/愛知）
ART OSAKA 2017（ホテルグランヴィア大阪/大阪）
ヨッちゃんビエンナーレ（オリエアートギャラリー/東京）
ART in PARK HOTEL TOKYO 2017（パークホテル東京/東京）
2018年　京都アートラウンジ（アンテルーム京都/京都）
ART in PARK HOTEL TOKYO 2018（パークホテル東京/東京）アイン ソフ ディスパッチより出品
船/橋わたす 2018（奈良県立大学/奈良）
愛でるブレイク前夜展Ⅲ（MEDEL GALLERY SHU/東京）
VOGUE FASHION7S NIGHT OUT 2018（神戸大丸/兵庫）
ART OSAKA 2018（ホテルグランヴィア大阪/大阪）アイン ソフ ディスパッチより出品
reJuvenation（STUDIO J/大阪）
2019年　ブレイク前夜（六本木ヒルズADギャラリー/東京）
2020年　ART NAGOYA 2020（ウェスティンナゴヤキャッスルホテル/名古屋）アイン ソフ ディスパッチより出品
artTNZ(TERRADA ART COMPLEX Ⅱ/東京）
ノンヒューマン・コントロール（TAV GALLERY/東京）
富士の山ビエンナーレ 2020（三嶋屋酒店、富士/静岡）

からその機能を剥奪し「オブジェ」としての価値を見いだす作品概念）の課題があり、これだ！とひらめきました。小さい頃から集めていたものがあり、私、めちゃくちゃ素材を持ってる！（笑）今も、気になったいい形のものがあるとストックしていますよ」。

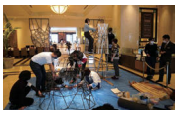
立体造形の感覚は高校時代にはしっかりと自覚があったようで、進学にあたり立体を学ぶことができる大学を志望した。しかし、その選び方がユニーク。直感で選んだという。「庄司達先生（名誉教授、２０１０年に退官）に教わりたくて大学に入ったんです。高校時代から庄司さんの作品は美術館で見て、凜としていて美しく、とても印象に残っていました。名芸で教えていることはオープンキャンパスへ行ってはじめて知りました。気難しそうで怖そうに見えましたが、話してみると穏やかでいいなあと思いました。学校の門をくぐったときから直感でここだと思っていました。私はここにいる気がするとか、そんな直感です。ほかの大学のオープンキャンパスへもいきましたが、先生に会って、この人からは絶対に教わりたくない、と感じたり。何の実績もないんですが、偉そうに先生を査定するようなつもりで見ていましたね（笑）」。直感は正しかったようで、今も師の教えを心に刻んでいるという。「先生から『やると決めたら失敗しても必ずやりきること。失敗するにしてもちゃんと失敗しなさい』と言われていました。失敗しなければわからないこともあるし、やりきらないとどうして失敗したのか、そのときの自分のレベルがどれくらいだったのか、そうしたこともわかりません。だから、やるとなったらきちんと仕事をしなさいといわれました。それは、今もすごく役に立っていて、私の軸になっています」。

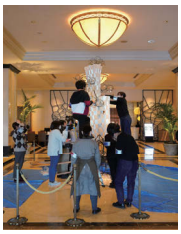
身近なモノを見つめ直し、その価値を再構築する作業。これは作品の制作だけでなく、人へのかかわりや、生きることすべてに通じるところがある。「今の学生を見ていると、就職しなきゃいけないとか、なにかにならなきゃいけないとか、先のことばかりを考えがちです。未来というのは身近にあるものの積み重ねであって、目の前にあるものにしっかり取り組んでいくことで、先のことが見えてくるのではないかと思います。身近なところから自分の興味を拡げていき、失敗しながらもやっていけば、それが別のことにつながり、なにかになるんだと思います」。失敗しながらも進んでいけばいいと学生たちに言葉をかける。モノもヒトも、一度フラットな関係で見つめ直し、その魅力を探っていく姿勢は変わりない。

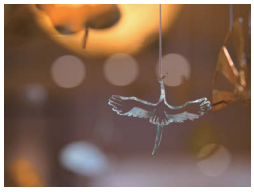
名古屋芸術大学
産学官連携
プロジェクト
Vol.7

名古屋マリオットアソシアホテル × 名古屋芸術大学

メタル＆ジュエリーデザインコースの学生が名古屋マリオットアソシアホテル正月装飾を制作しました







名古屋マリオットアソシアホテルロビーの正月装飾をメタル＆ジュエリーデザインコースの学生、卒業生が手がけました。鉄線を溶接して作られた亀のオブジェの上に、銀箔を貼った手漉和紙と縁起物をかたどった真鍮の飾りで彩った作品で、巨大でありながらも繊細な美しさのある作品に仕上がりました。1mほどの亀と岩を制作したのは、3年生の岡島真怜さん。自身が制作していた亀のオブジェを大きくしてブラッシュアップしています。米山和子准教授は、「前日まで学校で制作、現地で初めて合わせて不安でしたが何とか形になりました。真鍮の飾りには、多くの学生、卒業生が協力してくれました。数が必要な分、大変でしたが綺麗に仕上がりほっとしています」とコメントをいただきました。コロナ対策のため開けられた扉から外気と自然の光が入り込み、真鍮の飾りが風に揺れてきらきらと光を放ち、美しい佇まいを見せています。ホテルに訪れた人々がスマートフォンを取りだし、作品を撮影する姿も見られました。正月装飾は令和3年1月7日（木）まで展示されました。

表紙の写真

本学開学50周年記念事業として東キャンパス内に建設された「交流テラスTERA」。学部・領域を超えた交流を生み出す開放的な空間です。

「名古屋芸大グループ通信」ウェブサイト

発　　行：名古屋芸術大学
企画・編集：広報部
デザイン・協力：くまなエ房一社
印　　刷：㈱クイックス
発　行　日：2021年1月29日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学　広報部
〒481-8502
愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
電話　0568-24-0359
FAX　0568-24-0369
E-mail：grouptu-shin@nua.ac.jp

Japan Institution for Higher Education Evaluation
JIHEE since 2004
UNIVERSITY 2017

※記事中のホームページアドレスは、掲載先の諸事情で移転や閉鎖されている場合がございます。あらかじめご了承ください。